



古代交通陸線の研究の必要

長谷川久一

狩獵時代の人間は多く山の手に住居し鹿や猪等を獵して居た譯であるから、民族の大事を決するが爲めには、一同が廣々とした場所即ち地質學者の云ふビエモンプラトールに打ち集まる必要がある。又斯う云ふ高臺でなくとも河流に沿ふた沖積層の低地に集まつたこともあつたことは想像に難くない。前者は高天原であり後者は天ノ安河原であつて八百萬の神々が斯う云ふ廣い場所に神集ひに集ひ神謀りに謀つて社會國家の重大事が決定された。十月には凡ゆる

神々が若き男女の配偶を定めるため皆出雲に集まるから、外の土地に神が居なくなつてしまふため十月を神無月と云ふ所などから稽へて見ても屢々重要な會合協議が行はれたことが解るのである。そう考へて行けば高天原は固有名詞ではなくして普通名詞ではあるまいかと思はれてくる。社會の重大事の決定場所今の言葉で言へば議政壇場・政治の中心點といふ様な意味に外ならないのではないか。而して昔は土地が時々刻々に變化した譯であるから、これ等の議

場は常に轉々して行つたといふことは勿論の事であらう。

大和民族は元々此の日本に昔から居たものではなく、順次各方面から海を渡つて移住し來つたものに違ひない。西村眞次氏は其の名著『日本古代社會』の中に、日本へ一番先きに來たものはネグリト族で、次に舊アイヌが來りそれからツングース族が大舉してやつて來ると南方からはインドネジャ族と印度支那族とが入り、西からは支那人と蒙古族とが入つて來たと論じて居られる。それに對して一々論究を遂げるには到底其の違がないが兎に角原日本人は國外から來たものたることは近來諸學者の説の一致せる所である。而して神々の集合協議の習俗も日本に來る前から存在したことは明らかであらうと思ふ。日本人はこつちに來る前には岩の中に住んで居た。木造家屋に棲む様になつてから之れを家といふ様になつたが、家はつまり岩の訛りであると學者は論じて居る。衣食住のならばしも向ふから持ち來したと同様社會上の事も亦さうであつたことは贅言を要せざる所であらう。従つて高天原は波斯である、朝鮮

である、印度である、と云ふ様な説も全然誤りでは無いと思はれる。原日本人はアジヤの北方から東南全部にかけて廣がつて居て其の中からあるものがこつちへ渡來したのであるから、渡來以前の高天原は所々方々にあつたに違ひがない。即ち高天原複数説となつて來るのである。是に於てか高天原は抑も何處であるかと云ふ問題は天照大神が天孫に對し「豊葦原瑞穗國へ行いて治めよ」と云ふ大命を授けられた其の廣場は何處であつたかと云ふ一事に局限しなければ論點がきまつて來ないのである。

斯く云ふと高天原在外國説になるから直ぐに高天原在內國論者から攻撃を受けるに極まつて居る。いま後説の主張者井口丑三氏の言葉をかりて反對説に傾聽して見るとしよう。

高天原在外國説であるが、この説の結果は當然の順序として。

一 天照大御神は日本の國には出現しましたまざりしこと。

二 瓊々杵尊は外國より日本の西陲に到着し給ひしこと。

となりて、我が國體の淵源たる天壤無窮の大詔も如何にも力弱く感ぜらるゝのみならず、諸冊尊建國の傳説にも明に矛盾することゝなる。其も學術上何か有力なる證據を發見してのことならば格別なれど、何の根據もなく理由もなく唯漫然として高天原は支那にあり、朝鮮にあり乃至南洋にあり波斯にありなどいふのは些の價値なく、徒に缺點多き憶説といはねばならぬ。

以上の説は一見尤もらしく聞えるが如くで而かも反つて天壤無窮の大詔を意義あらしむるものではない。卽ち周知の如く此の大詔こそは本邦の國是であり雄圖遠猷であるべきものであるから尙ほ一層廣義に解釋して行くべきものではあるまいか。天孫は實に宏大無邊の鴻謨をお授かりになつて九州へ來られた。論者はこれを西陲と云ふけれども當時に在つては九州は決して西陲でなく一番文化の進み得べき可能性に富める地點であつたのである。故工學博士寺

野精一氏は本邦船舶の起源を研究せられて、吾が國の造船技術は板を重ねずに板と板とを兩方からよせて小口で接せしめ縫釘で打ちつけてゆく工法でこれは日本固有のものであり、支那あたりとは全く連絡がない、ひとり稍之に似たものは埃及の古船に於いて發見せられるゝのみと斷言せられた。斯る學術上の根據がある以上は、高天原は波斯どころか埃及にありと大きく云つて見ることも出來ようではないか。但し古代に在つて移動恒なかりし大和民族の政治の中心點卽ち高天原は實に西は埃及より北はゴビの沙漠の北方まで南の方は南洋のはてに至る迄の廣大なる範圍の間に始終何處かに轉々して存在して居たものと見るべきであらう。此の結論に到達すれば吾人は欣快偏に禁ずる能はざるものがあるではないか。是れこそ眞に天壤無窮の大詔を正解し得たりとすべきであらう。

然らば斯の如き廣き天地に廣がり居たる大和民族は何が故に日本群島の如き狭き天地に移れるのであるかといふ問題になつて來る。此れに對する答案は又頗る簡單明瞭であ

る。『動物地理學上孤島は人種の避難地であり保存地である。原日本人は日本群島に於いて比較的其の原型を保つことが出来た』(『日本古代社會』一四四頁)。即ち大陸に於ては常に戦亂相次ぎ王朝の交替走馬燈の如く到底萬世一系の皇統の維持は難かしいので天照大神は實に偉大な先見の明を有たれたのである。其の時思ひ切つて天孫を大八洲國に御遣はしになつて居なかつたとしたなら、今日はどうなつて居るか。敢て識者を俟たず三尺の童子と雖恐らくそれを知るであらう。然らば高天原在外國説は決して吾が國體に反するものではなく吾が國體其のものがそれに依つて以て明快に解説が能きるのである。但し天孫を愈々御差遣になる時の最終の盛儀のありし廣場たる高天原は埃及や波斯や蒙古乃至南洋ではなく大八洲群島の形勢を十分に精査する便宜のありしアジア大陸の東側たりし事は疑がなく、其の場所を的確に云へと云はれても一地點をさすことは能きないとするの外はない。大和民族が古代に在つて世界的大民族をりしことは伊弉諾尊・伊弉册尊の御命で天照大神

は高天原を月讀命は夜の國を素戔鳴尊は海原を治めることにおなりになつたので明らかである。夜の國は即ち常世國のことで常世國は閩越の地即ち現今の廣東福建方面である。海原は妣國(ハ、ノクニ)で即ち新良貴である。斯の如く勢力範圍廣きが中にも天照大神の御統治遊ばされた所は政治の中心點であるからにはどうしても三者の中間に相違ないと思はれる。そこで臆氣ではあるが最終の高天原は朝鮮と廣東福建との中間であつたとも定めることができるであらう。

而して其の次には伊弉諾・伊弉册兩尊の建國の事に溯る譯であるが、夙に大和民族は大陸方面に在つて大八洲群島のことを具さに研究した結果、民族の發展地として有望なるを認め先づ以て誰れかゞ行くべきことになつた。これが即ち紀記にある通ほり天祖なる國常立尊の命によつて二尊が降下されたと云ふことに該當するので、蓋し航海技術の優秀なるに任せて自由自在に海洋の波濤を乗りこへて渡來せられ隣くひまに壹岐・對馬・九州の北部・四國の一部・佐

渡隱岐、越後の一部を經略されたが先住民の抵抗もかなり猛烈であつたから矢張り御子の天照大神をば高天原へ御かへしになつた。即ち大神は日本群島にてお生まれになつたのだから、反對論者の掲ぐる第一項の攻撃は何等意味をなさないのである。而して大神は大八洲に關する豊富な知識を齎らして高天原に歸還されたが、尙爾來往來ののやら色々の方面から情報を蒐集せられ、萬世一系の皇統の永く統治すべきは大陸ではどうしてもいけない、殊に狩獵時代から今や將さに農耕時代に入れる大和民族永住の地としては水利に富める大八洲群島に若かずと決定せられ、且つ最初の上陸地點は日向の如き東は海に面し他の三方は山を繞らし特に防禦の完全な地點を選ぶべしといふ大經綸を樹立せられて、天孫を日向に御遣はしになつたのである。茅原華山氏は其の御進發の禱を語つて云ふ様。

其の鹵簿調度を見るも、雄風堂々宇内を睥睨する態度がある。アメノコヤネの命、フトタマの命、アメノウ

ズメの命、イシコリトメの命、タマノヤの命の五部神

及びオモカネの命、タチカラヲの命、アメノイハトワケの命等其の左右に配侍し、アメノコヤネの命、フトタマの命は特に降臨以後殿内に在つて克く天孫を奉護すべきの大命を拜し、アメノオシヒの命、アメノクメの命は弓矢劍戟を帯びて先驅を務め、伴造（トモノミヤツコ）は後衛に當り、二十五物部各々其の部將であつたとある。無論神武東征の時に於けるが如く、多數の武夫を従へられたに相違ない。其の人數、其の船數今日に於て臆測することが出来ないが、共に多數にして、舳艫相啣んで進發せられた光景を想像することが出来るでないか。

と。どうも此の説の方が高天原在內國説よりも穩當に相違ない。在內國説では高天原は或は近江なりと云ふ。其の結果は神武東征は東遷となり、久米博士等の往古に於けるアジャに於ける人類の大移住即ちグレート・マイグレーションの二大潮（第一は中央アジャから北アジャに向ひたるもの）の中の第二すなはち中央アジャから印度方面に

出てそれから海路により、安南・呂宋・閩を経て朝鮮・日本に向つた潮流を逆に行つた形ちになる。どうしても順次に東へ東へと行つたと見なければならぬ。そんなら伊弉諾・伊弉册二尊のことはどうだといふかも知れないが、此の時代のことは半ば歴史半ば神話で論理的に行つては居ない。學術的に論究するに足るのは瓊々杵尊以來のことであるから、瓊々杵尊は東の方の近江から日向に來られ、神武天皇は西から東へ行かれたと云ふことが承服できかねると思ふのである。尙ほ地質學的に云へば、日本が大陸の一部分であつた頃には人類の住みし形跡としては更になく、群島になつてから始めて人類が住み始めたといふのであるから、此の方面からも大和民族の秩序の組織的の経略は東へ東へと行つたと見るのが從來の通説にも合致し學術的にも正しいと思はれるのである。

以上を簡約すれば乃ほち一部の論者の信ずるが如くに、天孫は九州に會々漂着せられたのではない。漂流と云へば一隻か二隻のことである。若しも少數の人數が漂流して來

たとしたならば、縦ひ生命を完ふし得たりとするも先住民族の間に埋没してしまふのである。天孫の降臨は實際大八洲國を統治せしめんとする天照大神の御心より出でたる永遠無窮の鴻圖である。又天孫は雲の上から高山の絶頂に降臨せられた(紀記のしるす所)とするのは、今日の時世として稽へて見れば、本邦文化史上の最も嚴肅なる事實を餘りに滑稽化する見方である。どうしても西から九州の南端を廻はつて船で日向に上降せられたものである。従つて最終の高天原は波斯や印度ではなく南韓であると云ふ説が一番真に近からう。朝鮮だと云ふのを徒らに毛嫌する人が多いとするならば南韓から福建あたり迄のアジヤの東海岸と見るが蓋し穩當ならんと思はれる。而して近江と目の古墳の状態を比較して見ても近江から來られたものでないことが一目瞭然であらう。尙ほ古代の交通が陸線と海線との二つであつて陸線の方は先史時代の石器や土器から推斷が能きるのであるから、今後各地に於て出土せる物品の考古學的研究や其の他色々の人文地理學的・地質學的の學理に

照らせる論究により此れ等の交通路を明らかにし以て眞實の日本歴史の編制に貢獻せしめたと思ふのである。さしづめ日向國に於ける天孫の御上陸地點が最先の研究問題であらうし夫れより以後の大和民族の文化の向上のあとが交通路の研究によつて明らかになることが望ましい。それがためには古代史の記事そのものに捉らはれずして此の方面の自由討究の氣運の今後益々盛んならんことを偏に翹望せ

道路費負擔論に就て

岡崎 早太郎

一 緒 言

府縣三部經濟制度の存在に關聯し、道路法第十七條但書の規定が論議せられる。本誌一月號及二月號に續掲された、堀切武井二家の高論である。所謂三部經濟制度の廢止が一府縣で行はれ、道路法が實施されて十年も経た今日から

ざるを得ない。蓋し古代の史實は祖國の歴史の中でも最も重要な部分であるに拘はらず論述が幼稚である。今後人種の上からも經濟の上からも生活様式の上からも種々様々に探究して以て進歩せる論究を築き上げなければならぬが、就中交通の方面からするものが最も效果的なるを信するが故である。

看ると、二家の御論はいづれ劣らぬ、妥當な見解であらう。

さり乍ら道路法第十七條但書の規定は、内務省の記録に存するか如何かは知らないが、府縣三部經濟制度の廢止から、特別市制へ進出の前程として、六大都市あたりの懇望から出現した産物で、いまさら都市側からは苦情の言へた義理